驚異的なまでの高S／Nを極めてリジッドな作りにより実現

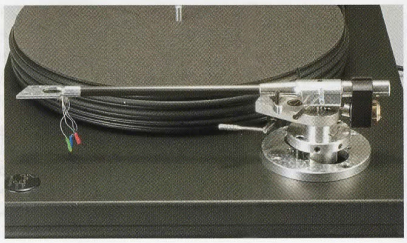
NOTTINGHAM

Interspace Jr.

¥312,900

SPEC <ターンテーブル部>●ターンテーブル(プラッター):厚さ37mm、質量7kg、特殊アルミ合金製●ターンテーブルベース:50mmブナ材HDFウッド●駆動方式:精密24極トルク、ローノイズシンクロナスモーター、シングルベルトドライブ●回転(rpm):33 1/3、45(ベルトのかけ替えで対応)<トーンアーム部>●アームタイプ:9インチカーボンファイバー製(ワンアーム仕様)●軸受:特殊コバルト合金によるワンポイントベアリング方式●カートリッジ適応重量:6〜15g●サイズ:475W×380D×130Hmm●質量:14kg●取り扱い:ヨシノトレーディング(株)

熟練の職人により加工されるという一点支持のストレートアームを搭載。アルミ、真鍮、ステンレス、カーボンなどの異種素材が組み合わさったこのアームは、極めて高い精度を誇っている。シェルリード線は極細なので、取り扱いには注意したい



極小トルクのモーターと精巧な作りのトーンアーム

イギリスの比較的新しいアナログプレーヤー・メーカー、ノッティンガム・アナログ・スタジオのモデルである。ベースプレートはブナの集積材で、プラッターは7kgの特殊アルミ合金。このプラッターはゴムベルトを介して24極のシンクロナスモーターで駆動されるのだが、このモーターは振動やノイズを極力少なくするために極小のトルクしか発生することができず、使用時にはリスナーが自らプラッターを回してスタートさせる必要がある。トーンアームはカーボン繊維を使った非常に精巧なものだ。

デジタルデータと疑うほどの極めて高S／Nな再生音

レコードに針を落とし、聴き始めて我が耳を疑った。これはハイレゾデータか何かの音なのではないか、と。微かなスクラッチノイズがあることを除けば、デジタルデータとほぼ同じ聴感上のS／Nの極めて高い音がそこにある。アナログらしくない……といえば、そうなのだろう。だが、そもそもアナログらしさとはどういうものなのだろう。それはレコードという不完全なメディアに由来する必要悪のようなものなのではないだろうか。その必要悪を私達はありがたがっているのではないだろうか。その意味合いで、アナログらしくない本機のサウンドは純粋である。また、聴き進むにしたがって本機のサウンドにはレコードの質感そのものが含まれていることが分かってきた。これが真のアナログらしさなのかもしれない。

音の違い

MM/MCカートリッジによる

MM

NAGAOKA
MP-500

無限と感じさせる音場感

静か、というのが第一印象である。試聴室レベルの音圧でマーラーの5番を盛大に鳴らしていたのだが、それでも静寂感が支配的なのだ。音と音の間が静かなので、音場に無限の広がりがあるようにすら感じられる。エネルギーバランスは細身な摩天楼型だが、低音の伸びは素晴らしい。音楽的には非演出型で演奏の瑕疵には厳しいが、それが痛快だ。

MC

AUDIO-TECHNICA
AT33PTG/Ⅱ

これぞアナログという趣の音

ほかのカートリッジではデジタル的なサウンドが得られたが、この組み合わせからはこれぞアナログといった趣の表現が引き出せた。聴感上のSN比が後退しているわけではないのだが、とにかくアナログ的なのだ。エネルギーバランスは堂々たるピラミッド型。音楽的には非演出を基本としているものの、各楽器の表情や音色を楽しく聴かせてくれる。